

6.金毘羅山周辺

金毘羅山(標高92m)～柴尾墓地～河内滝～修福寺～長慶寺～崇福寺～旧浜脇中学校



朝見川河口のケーソンの突端から金毘羅山を眺める。大きなマンションのすぐ左のブツと膨れた部分が金毘羅山。今では植生も変わって、すっかり目立たなくなってしまった。

わたしが小学姓だった頃、この山は月に一度は登る遊び場だった。特に目当ての虫が多いとか、食べられる実があるとかいうことはない山だったが、なんとなくいつも登っていたものだ。もっとも、南麓には柴尾墓地が広がっていて、そこの方が子どもには楽しい場所だった。

墓地の方へ行くには金毘羅山の登り口から右に行き、十字路をまた右に曲がって行く。その

金毘羅山は海拔130メートルほどの山塊の海側のピークで92メートルしかない。しかし「山は高いばかりが尊からず」というのがモチーフのテレビ番組があるが、この山もおそらくは漁師や船乗りにとって海から見て覚えやすい地形が、信仰に結び付いたのだろう。ピークの頂に1890年頃(寛政年間)に金毘羅社が勧進されてから、浜脇地区の住民から金毘羅山と呼ばれている。



なるほど、今はもう金毘羅山頂上近くの新金毘羅社のある場所からは木々に隠れて、朝見川の河口は見る事が出来ない。

曲がり角からいくつも洞穴があって、中には人の住んでいる大きなものもあった。

子どもの頃は戦時中の防空壕だと聞かされていたが、実は横穴式の古墳群で、ここ金毘羅山横穴式古墳群のほかにも、金毘羅山の周辺には柴尾・平原横穴式古墳群などが点在しており、そのこともあって現在の市営柴尾墓地になったようだ。変哲もない山だと思っていた、信仰の対象に相応しい歴史が隠されていたようだ。

もっとも、横穴古墳なら一つひとつはそれほど大きくないはずだ。昭和30年に「もはや戦後ではない」と言われたそうだが、少なくともわたしが小学生だった昭和39年までは現に戦後を生きている人たちがいた。その人たちはこの山やもっと北西に行ったとこ



今は塞がれて仲がどうなっているか伺えなくなったが、戦争中は中を掘り広げて防空壕にして、戦後は倉庫や住まいにしていた。

ろにある尺間山の中腹に開けられていた防空壕を住まいにしていたのだ。この金比羅山の防空壕も横穴古墳を掘り広げたものを、さらに住宅用に掘り広げていたようだ。遺跡保存などという言葉も考えもなかった時代のことだ。住宅になっていた横穴の正面は戸建ての家の玄関のようなしつらえがしてあったのだけど、横から見るとその玄関から後ろの崖までが1メートルか2メートルしかなく、子ども心に不思議に思っていたものだった。

浜脇中学校跡地の上の四つ辻から、山の方に曲がり、いくつかの今は入り口をふさいである横穴を見ながら曲がりくねった道を少し上ると墓地群に着く。まず、最初にキリスト教のための墓地がある。

その頃の別府ではさすがに大方の埋葬は火葬だったが、このキリスト教徒の墓地は土葬だと聞いていた。なんとなく薄気味が悪いし、白いマリア像があったりして、さすがの悪ガキもここでは悪さが出来なかった。

その先の柴尾墓地は今でこそ整理されて新しい墓石も多く並んでいるが、わたしが子どもの頃は墓石の間のサクラの木にセミがたくさんいて、夏休みにはそれを捕まえに毎日のように通ったものだ。たまには、墓石の上に上がったりして罰当たりなこともしても、あの頃は盆参りの時以外には、ほとんど人影もなく特に咎められることもなかった。

今は荒れ放題になっているが、浜田川を挟んで墓地の反対側に小さなため池があり、春咲きにはアカガエル、蓮華草の咲くころにはヒキガエルが産卵していた。当時はまだあった田んぼの端にはオオイタサンショウウオも産卵していたし、5月を過ぎるとイモリもたくさん出てきた。その分、ヤマカガシやシマヘビ、シマヘビの老成型であるクロヘビなどもたくさんいた。

ヤマカガシは大分県ではカラスヘビと呼んでいて、子どもらは格好のおもちゃにしていた。シマヘビもきれいでおとなしいので怖くはなかったが、クロヘビは真っ黒なうえに大きいのでさすがの我々も逃げ出していた。

今は跡形もなくなったその小さなため池の傍に、不思議な家族が暮らしていた。浜脇や向浜（現在の浜町）の子どもたちは、その家族の主人を街で見かけるとひそひそと「仙人」がきたとささやいたものだが、ちょうど同い年格好の男の子を頭に小さな子ども3人と奥さんとで、電気もない生活をしていた。小学校区はわたしと違うのだけど、その男の子はどうも学校に行っていないかったようだ。わたしはいつの間にか彼と仲良くなり、その掘立小屋のような家に



浜脇地区の代表的な公共墓地「柴尾墓地」に接してカトリック墓地がある。柴尾墓地にはサクラの木がたくさん植えてあって、夏はセミ取りに行つて、墓石の上にも平気で登ったものだが、なぜかこちらの墓地には、別に入つてはいけないとは書いてなかったが、遠慮してあまり入ることはなかった。



旧浜脇中学校の上を通る市道の脇に参道の入り口がある。わたしが子どもの頃は明治時代に寄進されたという鳥居はもちろん、こんな立派な鳥居もなかった。しかし、よりによって青に塗ったセンスは頂けない。

も遊びに行くようになった。そんな家には不釣り合いな天体望遠鏡があつて、それで紙に映した太陽の黒点を見せてくれたこともあつた。

一度だけ、その男の人に怒られたことがあつた。それは一緒に遊んでいた友だちとけんかをして、その男の子と一緒に追いついた時だった。自分の子どもだけでなく、わたしも並べておいて、やさしくでは立ったが厳しく、諄々とわたし達の諍いをせめ、今追いついたわたしの友だちの家に謝りに行くよう諭してくれた。おじさんは一体どういう人かと不思議に思いながら、謂われた通りふたりで謝りに行ったことを今でも思い出すことがある。わたしが中学に上がった頃、その家族はいなくなり、掘っ立て小屋もいつの間にか撤去されてしまったが、不思議な経験だった。



昔は泳ぐこともできた河内滝だが、相次ぐ洪水のお陰で滝壺が浅くなってしまい、今は訪れる人もないようだ。橋の上からのぞくと不動堂もすっかり古ぼけている。

浜脇中学校の四つ辻まで戻って、左に曲がると金毘羅山の登り口の鳥居の前に出る。わたしが子どもの頃には、この鳥居はなかったが、よりによって青く塗られているのが奇妙だ。金毘羅社までの道は、地元の人たちのボランティア活動で、きれいに整備されている。20分ほどで社に着く。

鳥居まで戻ってさらに左へ向かうと鳥越峠を通過して挟間(由布市)に抜ける道を過ぎて、河内川に掛かる橋がある。橋から下を見ると今はさびれてしまった不動堂がある。不動堂の先に子どもの頃はよく泳いだ河内滝の滝壺があるが、今は水量も少なく上流側の開発で滝の姿は見る影もない

河内橋のたもとから下に降りてゆくと、河内滝からくる川筋に出、そこからほど近いところでまず修福禅

寺に参る。正直言って子どもの頃はこの寺にはあまり馴染みはなかった。

そこから河内川を離れて東別府の方に行くと長慶寺がある。



誰もがこの寺を正式に長慶寺とは呼ばず下ん寺と呼んでいた。この山門は今、内側から見ているが、寺の奥を抜けると墓地があつて、さらにその奥には小さな池があつてイモリやトノサマガエルがたくさんいた。最もヤマカガシもいて、それを捕まえてはおもちゃにしていた。

この寺の名前が長慶寺だと知ったのは、高校生くらいになってからで、それまでは「下ん寺」と呼んでいた。わたしひとりだけがそう呼んでいたわけではなく、地域の人

は誰でも「下ん寺」と呼んでいたし、仮に誰かが「長慶寺はどこですか」なんて聞いたとしても応えられる人は少なかった。

「下ん寺」があるということは当然、「上ん寺」もある



河内川にほど近いところにある修福寺も京都宇治の黄檗宗総本山萬福寺の末寺で由緒正しいのだが、どうも、わたし達土地の子どもにとっては上ん寺、下ん寺に比べて親しみもなく、いたずらをしに入った記憶もない。

わけで、下ん寺の山門の脇から石段を登ったところが「上ん寺」崇福寺の庫裏と本堂である。この寺は臨済宗妙心寺派の古刹で、大友宗麟所縁の寺でもあるのだが、わたしたち子どもにとっては格好の遊び場だった。崇福寺の山門を東側にくぐると、浜脇中学校に向かう通学路に出て、そこからは桜並木が続いていた。桜の時期はわたしの住んでいた町内からも遠目に見事な花を見ることが出来たし、当時の中学校の校庭は、花見の人々で賑やかだった。

別府の南部地区の人口減少のため、市立の小中学校の統廃合が進んで、とうとうこの浜脇中学校も廃校となった。わたしもこの中学校区に住んでいたのだが、大分の中学校に通うことになり、当時走っていた別大電車で通学していた。それでもこの由緒ある中学校が無くなったことは寂しくも悲しい出来事だった。浜脇中学校を母校としていた、小学校の同級生たちの思いや如何と思わざるを得ない。



地域では上ん寺と呼ばれている崇福寺は臨済宗の古刹だが、下ん寺と呼ばれる長慶寺の横の石段を上って庫裏の側から入って、この鐘樓の向うに見える山門をくぐって出ると、今は廃校となった浜脇中学校の桜並木の下に出ることが出来ていた。